

アメリカのテレビドラマにおけるマダム・バタフライ
—*The Courtship of Eddie's Father*を例に—
Madame Butterfly Figure on the U.S. TV Series, *The Courtship of
Eddie's Father*

◎俣野 裕美
Yumi MATANO

同志社大学 社会学研究科 メディア学専攻 博士後期課程 Doshisha University, Graduate School of
Media Studies

要旨・・・本論はアメリカのテレビドラマ、*The Courtship of Eddie's Father*に登場する日本人女性、ミセス・リビングストンの表象についてヘゲモニー理論を基に研究したものである。彼女の表象は、白人男性のために自己犠牲をするマダム・バタフライ像を踏襲していた。しかし、通常のマダム・バタフライ像とは異なり、自発的に自己犠牲を行う姿が見られた。本ドラマが放送されたのは、社会運動が隆盛の60年代後半から70年代前半であったが、この時代に白人男性から自己犠牲を強いられる日本人女性という、アメリカ社会の差別構造を露呈する像は描きにくかったと考えられる。そこで自発性の要素が加えられ、日本人女性は白人男性の優位を確立する人物であるという、支配者集団が好む考え方について、人々からの合意形成を促すことを容易にする像が形成された。

キーワード アメリカのテレビドラマ、表象、マダム・バタフライ、ナンシー梅木 (Miyoshi Umeki)、日本人女性像

1. はじめに

アジア系の女性は、歴史的に欧米の人々の興味や関心を引き付けてきた。古くは旅行記や小説などにその姿が、文章や写真、絵などによって描かれ、後に映画などの映像メディアにも登場するようになった。侮蔑的、好意的、エキゾチックなイメージなど様々な形態が存在するが、アジア系の女性は総じて、白人女性とは違った異質な存在として人々の注目を集め、その表象のされ方を巡る研究は現在でも盛んに行われている。特に、映画が研究対象とされることが多く、アジア系女性の表象にはステレオタイプや過度な性的魅力の付与があることが指摘されている (Wong 1978; Tajima 1989; Prasso 2006; Shimizu 2007)。

本研究ではアジア系表象の研究対象となることが少ない、アメリカのテレビドラマに焦点を当てる。アジア系女性の中でも、日本人女性が主要な役柄を演じた初期のドラマ作品の一つ (Hamamoto 1994) とされる、*The Courtship of Eddie's Father* (1969-1972年)を取り上げた。作中で日本人のハウス・キーパー役として登場する、ミセス・リビングストン (英語名:Miyoshi Umeki、日本語名:ナンシー梅木) の表象を分析し、時代背景と共に考察する。

2. 研究の方法

(1) 理論的枠組み

本研究の理論的な枠組みには、アントニオ・グラムシのヘゲモニー論を用いる。メディアは権力者層の意向に沿う形で情報発信を行う (Park and Wilkins 2005) とされるため、表象の問題を扱う時、権力やヘゲモニーとの関連性が頻りに指摘される。ヘゲモニーは一般的に、上位にいる者が下位にいる者を無条件に従わせることとして理解されることが多い。しかしグラムシは、権力者達は物理的な力ではなく、知識人等を利用した道徳的、文化的、イデオロギー的指導を行うことによって、自集団に対する人々からの合意を取り付けようとする過程としてヘゲモニーを捉えた (グラムシ 1963)。ホール(1997)も彼の理論を自身の研究に応用し、表象とは、支配者集団が人々からの合意を得るためのせめぎ合いを行う場であるとした。つまり表象には、支配者側が自らの利益を維持、獲得するために、人種との関係で人々に同意形成を促したいと考える内容が含まれているといえる。本研究はこうしたヘゲモニ

一理論の枠組みを土台にミセス・リビングストンの表象を分析、考察する。

(2) 表象分析の手法

表象分析の具体的な方法について説明しておきたい。メディア作品の分析や表象分析は、時に主観性が指摘されることがあり(藤田 2009; 藤田・岡井 2009)、いかに客観性を担保するのが重要な課題となる。そのため本研究ではまず、作品を視聴しながらミセス・リビングストンが登場する場面の会話を全て文字に書き起こすことにした。書き起こした資料を元に、ミセス・リビングストンと他の登場人物とのやり取りの中で繰り返されるパターンから、彼女の表象を分析する方法を取った。また、本作のシーズンは1~3まで存在するが、3は現在DVD、VHSが未発売である。シーズン3は、関連書籍等でその内容を確認するのみに留めた。

3. *The Courtship of Eddie's Father* とは

ドラマの基本的な概要と登場人物について述べておきたい。本作品は、1969年9月から1972年6月にかけてネットワークテレビ局のABCにて放送された30分のコメディドラマである。原作は1961年のMark Tobyによる雑誌の連載小説で、1963年に同名で映画化された。これらを基にして、James Komackがプロデューサーを務めて製作したドラマである。ヒット作とは言えないまでも、何度も再放送が行われたり、近年でもリメイクの企画が持ち上がったほど、人々の記憶に刻まれた番組である¹。

妻を亡くした雑誌編集者のトム(Bill Bixby)を主人公に、彼の息子、エディ(Brandon Cruz)との日常生活や、彼らが新しい妻、母に相応しい女性を探す姿が愉快的タッチで描かれる(両者は白人男性)。トムは多忙な仕事と慣れない子育てに翻弄されながらも、エディには愛情を持って教育をする。各エピソードで巻き起こされるハプニングの解消を通じて、トムはエディに人生を生きる上で大切にしなければならない様々な事柄を温かく丁寧に教えていく。ミセス・リビングストンは、二人の身の回りの世話をする日本人のハウス・キーパーである。主に炊事、洗濯、掃除、エディの世話を担当している。アジア系女性のステレオタイプ像の一つ、「ゲイシャ」を喚起させる(Hamamoto 1994; Praso 2006)と指摘される程、彼女はトムとエディの二人の男性に献身的である。優しく物腰の柔らかな女性で、心から楽しんで職務をこなしている様子である。日本からアメリカに渡って日が浅いため、英語の語学学校に通いながらハウス・キーパーとして働くことで生計を立てている。過去に夫と息子を事故で亡くしており、トムと同じ悲劇を経験した人物でもある。彼女は、トムとエディのハプニングの解決にも知恵や力を貸すことがあり、三人は互いを信頼し合っている²。

4. マダム・バタフライ像の踏襲

(1) 妻、母としての表象

Kim(2004)によると、ミセス・リビングストンはハウス・キーパーでありながら、トムとエディの実質上の妻、母親として機能しているという。彼女とトムは実質上の夫婦、そしてエディの両親であり、三人は一つの家族として描かれているとの指摘がある。実際、作中でも家族を彷彿とさせるような場面が描かれる。献身的なミセス・リビングストンは、家事を仕事上の義務として機械的にこなすようなことはせず、トムとエディの幸せを一番に考えて働き、また課せられた業務内容以外の妻や母親のような役割を自発的に引き受ける。エディの発言や悩み事には必ず耳を傾けて相談に乗っているし、彼の小さな心身の異変も見逃さない。またトムも彼女に信頼を寄せ、エディの教育について意見を求め、二人で話し合うことがある。二人がエディの起こした様々なトラブルを共に解決する様子や彼の成長ぶりを喜ぶ姿は、両親とその息子のようなものである。三人はハウス・キーパーと父子という設定だが、Kimの指摘する通り、彼らは明らかに家族として描かれており、ミセス・リビングストンは実質上の妻、母親として、そしてトムは彼女の夫、エディは息子として存在しているのである。

(2) 自己犠牲

Kimの先行研究を基にして、会話を書き起こした資料から彼女の表象を分析すると、彼女は白人男性のために自ら進んで自己犠牲的な行動を取ることを繰り返していた。実質上の夫、息子であるトムとエディは、ミセス・リビングストンという実質上の妻、母を持ちながら、新しい妻、母親に相応しい女性を探し、手に入れる自由を持つ。彼らはミセス・リビングストンだけを手に入れることも、新しい女性だけを手に入れることも、もしくは両者を手に入れることも可能な状態である。一方、妻、母として機能するミセス・リビングストンは、このような自由は保

持しない。彼女は、彼らの自由が危機的状況に置かれた時には、いつでも妻、母の立場を捨てて彼らの元を去る、またはその立場を堅持して彼らの傍に控えるという態度を繰り返し、彼らの自由を守ることを暗示する行動を取っていた。紙幅の関係で会話を記すことはできないが、以下では例をいくつか挙げて説明したい。

シーズン 1 のエピソード 20 では、ミセス・リビングストンは不都合が生じれば、妻、母の立場を捨て、二人の元から離れるという態度を示している。このエピソードで彼女は、夜に寝付けないと訴えるエディに子守唄を歌う。眠気を覚えたエディは、自分にはミセス・リビングストンという母親がいるから、もう新しい母親を探す必要はないと呟く。それを聞いた彼女は、自分の存在は、将来トムの妻、エディの母親となる女性に対して不公平になると考える。エディへの愛着に後ろ髪を引かれながらも、退職をして二人の元から去ると断腸の思いでトムに申し出る。

これは、彼女がハウス・キーパーとしての職分を守った故の行為ともいえよう。しかし、三人が家族として描かれている前提を考えると、それ以上の意味が浮かび上がる。実質上の夫、息子であるトムとエディは、ミセス・リビングストンという妻、母を持ちながら、新しい女性を探す自由を保持する。どちらか一方、または両方を獲得する自由を有する。しかし、エディがミセス・リビングストンを本当の母親のように捉えるということは、二人が他の新しい女性を探して手に入れる自由が危機に晒されている状態である。この状況に際し、彼女は二人の元から去るという態度を示し、彼らが心置きなく新しい女性を探すことが可能な下地を作るのである。ここには、トムとエディは夫、息子でありながら、他の女性を探す自由を保持し、ミセス・リビングストンは妻、母でありながら二人の自由を守るために、自ら身を引くという構図が形成されている。彼女はその後すぐに、トムの友人の計らいにより、再び彼らの家での勤務に戻っている。しかし彼女の行為は、不都合が生じれば、いつでも妻、母の立場から離れて二人の元から去り、彼らが女性を選ぶ自由を守るということを暗示している。

また、シーズン 1 のエピソード 9 では、妻、母の立場を堅持して二人の自由を守ることを示す行動を取っている。ミセス・リビングストンは、アメリカで出会った日本人男性と恋に落ち、結婚して日本に帰国することになった。彼女の帰国を知ったエディは、別れの寂しさから悲嘆に暮れる日々を過ごす。ミセス・リビングストンは落ち込むエディの様子を見て、悩んだ末に日本人男性との結婚の約束を破棄する。

この決断は、彼女のエディに対する愛情から生じたものであろう。しかし、三人の家族としての表象を鑑みると別の意味が出現する。ミセス・リビングストンが結婚をして帰国するという事は、トムとエディが彼女を手に入れる自由を失うということである。実質上の妻、母を持ちながら新しい女性を探し、そのどちらか、もしくは両方を選ぶ自由が危機的状況に晒されているのである。この状態に対し、ミセス・リビングストンは自らの結婚の希望を曲げ、母、妻としての立場を堅持し、彼らの元に留まる決断を下すのである。このエピソードにもトムとエディの自由を守ることの暗示が存在する。

この他にも、母、妻としての立場を捨てる、堅持することによって、トムとエディが女性を取捨選択する自由を維持する行動を取っている場面が見られた。設定上は、彼女はハウス・キーパーである。そのため、自らの職分を守ったり、二人の快適さや幸せを願って行動することは自然なことであろう。しかし、三人が家族として表象されていることを鑑みると、妻、母である彼女が、二人が女性を取捨選択する自由を維持するため、いつでもそばに控え、都合が悪くなれば去るという構図になる。彼女は白人男性であるトムとエディのために、自己犠牲的な行動を取っているのである。

(3) 自発的なマダム・バタフライ

自殺という悲劇的な要素は存在しないものの、このように自らを犠牲にすることで白人男性の優位性が確立される日本人女性表象には、19世紀後半から小説や舞台、映画等に幾度となく登場したマダム・バタフライ像の踏襲が見られる。これは、アジア系女性、特に日本人女性を描く際に最も使用されやすい典型像である³。しかし、通常のマダム・バタフライ像に欠けている重要な点がある。

通常の *Madame Butterfly* のストーリーでは、白人男性のピンカートンが日本でマダム・バタフライ（蝶々さん）と恋に落ち、必ず戻ると彼女に約束してアメリカに帰国する。マダム・バタフライは、彼の帰りをただ愚直に信じて待ち続け、彼の子供を出産する。ピンカートンはアメリカで白人女性と結婚した後に日本に戻り、彼女が生んだ子供の引き取りを要求する。捨てられたマダム・バタフライは、子供の将来のために思って引き渡しを了承し、自らの幸せを犠牲にして自殺をする。

ピンカートンは当初からマダム・バタフライとの関係を真剣には捉えてはおらず、冷淡で偽善的な人物である。

一方のマダム・バタフライは、このような彼を信じ続けるのみの愚かな存在であり、彼の身勝手によって彼女は自殺へと追いやられる。Marchetti(1993)によると、悲劇的な結末ではあるが、結果的にピンカートンは全てを手にするという。結末での彼は、アジアの女性の恋心を獲得しながら、白人男性が支配する父権的な家庭を維持することになる。更に彼女の消滅（自殺）は、白人男性が人種の他者をコントロールすることが可能であることを示すという。つまり、マダム・バタフライの自己犠牲によって白人男性の優位性が確立されるのである。このように通常のマダム・バタフライ像は、愚かな日本人女性が自己犠牲を強いられ、それによって白人男性の優位が保たれる。しかし、本ドラマのマダム・バタフライはそうではない。トムとエディはミセス・リビングストーンに対して常に親切で誠実な態度で接しており、彼女に留まって欲しいとも、去って欲しいとも言わない⁴。ミセス・リビングストーンは、トムとエディの自由が危機的状況にあることを自ら察知、判断し、自発的な形で自己犠牲をするのである。彼女は自発性のあるマダム・バタフライなのである。

5. 社会運動期のマダム・バタフライ像

(1)Madame Butterfly の変遷

なぜ自発的に自己犠牲をするマダム・バタフライが誕生したのであろうか。そもそも、*Madame Butterfly* の物語は、これまでに様々な変化を遂げてきた。*Madame Butterfly* の変遷を研究した満谷(1994)によると、今日、一般に親しまれている形での *Madame Butterfly* (1906年にパリで初演された舞台)に至るまでには、ピンカートンとマダム・バタフライの人物像にある変化が起こったという。元のピンカートンは、帝国主義の非人間性を内包し、日本や日本人女性を露骨に蔑んだ視線で見つめる傲慢な人物であり、マダム・バタフライも彼に騙されたという実感を持たない、理性の無い愚かさが際立つ女性であった。それが時代を経て、ピンカートンの傲慢さや身勝手さが和らげられ、またマダム・バタフライの愚かさの描写が軽減されたことで、今日親しまれている悲恋の感動物語が作られたという。改定前の方がアメリカ帝国主義への批判が込められており、政治的なメッセージが明確に含まれているため、こちらに戻すべきだという動きさえあるという。*Madame Butterfly* が人々の心に受け入れられるようになるには、帝国主義の残忍さを感じさせないような人物像へと二人を変える必要があったのである。

(2)社会運動の隆盛期

表象はその時の社会的文脈と関連がある(Shohat 1994)。本ドラマが製作、放送された1960年代後半から1970年代前半までがいかなる時代であったかを簡単に振り返りたい。この時期は、公民権運動に端を発した社会運動やそれに伴う文化が隆盛を極め、アメリカの歴史に多大な影響を与えた時代である(古矢 2006)。50年代後半に始まり60年代前半にピークを迎えた公民権運動に始まる、アフリカ系アメリカ人やその他のマイノリティ差別に対する抗議活動では人種差別の撤廃が求められ、またその流れから派生したウーマン・リブにより、女性の権利や地位の向上も叫ばれた。更に、大学生を中心としたベトナム戦争への反戦運動が各地で開催された。このような風潮の中、若い世代の間ではヒッピーに代表されるように、既存の支配文化に対する反抗の文化が生まれることとなった。こうした動きを受け、マイノリティや女性達は放送業界においても、性差別や人種差別を排除しようと働きかけを強めた(坂本 2006)。この時期で社会の全ての歪みが是正されたわけではなく、今日も差別の問題は根強く残っている。しかし、本ドラマが放送された期間は、既存の体制や白人中心主義、男性優位に対して徹底的に異議が唱えられた時代であったといえる。

(3)ヘゲモニーとマダム・バタフライ像

このような社会情勢の中、ミセス・リビングストーンはこの時代の風潮に合致した像だといえる。先述のように、ヘゲモニーの理論から考えると、表象には支配者集団が人種との関係で肯定したいと考える内容が含まれており、それについて人々の同意を形成しようとする機能が存在する。たとえ社会の不正が正されようとする風潮の中にあっても、メディア上では支配者集団の意向を完全には消し去ることができない側面が存在する⁵。

社会運動の激しい時代に、傲慢で身勝手な白人男性によって自己犠牲を押し付けられるだけの、判断力の無い愚かな日本人女性としてミセス・リビングストーンを描くことは支配者集団にとって好ましいことではない。人種差別や偏見に敏感な時代に、白人男性によって日本人女性が搾取されるという露骨な描き方は、アメリカ社会の人種的な差別構造や不平等、不正を露呈し、人々からの反感を呼ぶことになるからである。そこで、*Madame Butterfly* が人物像を変化させて人々に感動をもたらす物語へと発展したのと同様、ミセス・リビングストンのマダム・バタフ

ライ像も変化を遂げた。日本人女性は強いられたい追いつめられたりするのではなく、自ら自発的に判断して白人男性に自己犠牲をするようになったのである。このようなマダム・バタフライ像ならば、アメリカ社会の差別構造は暴かれないまま、白人男性の優位性が日本人女性の一方的な希望によって保たれる形となる。この形なら、社会の不正が露呈しない上に人々からの反感も得にくい。日本人女性は白人男性の優位性を確立する存在であるという、支配者集団が人種との関係で肯定したい内容について、人々からの合意の形成が容易になるのである。ミセス・リビングストンは、社会運動が隆盛を極めた時代に沿うように再構築されたマダム・バタフライ像だと考えられる。

6. おわりに

本研究では、ヘゲモニーの理論を基に *The Courtship of Eddie's Father* における日本人女性、ミセス・リビングストンの表象を考察した。表象分析の結果、彼女が自発的に自己犠牲を行うマダム・バタフライ像を付与されていることが分かった。通常のマダム・バタフライ像には見られないその自発的な自己犠牲について、*Madame Butterfly* の物語の変遷、ドラマが放送された時期のアメリカの時代背景から考察を行った。彼女の表象は、社会の差別を露呈することのない形で、日本人女性は白人男性の優位性を確立する存在であるという、支配者集団が好む考え方について合意形成を促すものであることを指摘した。ミセス・リビングストンの表象は、当時の「進歩的」なマダム・バタフライ像であったといえよう。1970年代以降のテレビドラマにマダム・バタフライ像は踏襲されているのか、また、日本人女性の表象形態の変遷については、今後の研究課題としたい。

補注

- 1 小説版にも映画版にも、日本人女性、またはアジア系の女性は登場しない。
- 2 リビングストン (Livingston) という西洋風の名前になっているが、日本語の苗字をそのまま英語に翻訳したものであると作中で語られている。また、彼女の名前が言及されることはなく、作中では常に Mrs. Livingston と呼ばれている。
- 3 舞台の『ミス・サイゴン』、映画の『007 は二度死ぬ』(1964)のキッシー・スズキなどはこの典型例として紹介されている(満谷 1994)。
- 4 作中でトムが、ミセス・リビングストンを「メイド(maid)」として捉えておらず、「ハウス・キーパー(housekeeper)」として捉えていると断言するシーンがある。トムとエディは彼女を見下すような態度を取ることはない。
- 5 例えば 1960年代に登場したアジア系アメリカ人のモデル・マイノリティ描写は、その典型である。この年代には、アジア系アメリカ人、特に日系アメリカ人や中国系アメリカ人が社会で学術的、経済的な成功を収めていることがメディア上で高く評価された。アジア系アメリカ人を勤勉に働くことによって成功を達成した人々として描くことで、政府に援助や改革を求めるアフリカ系アメリカ人などのマイノリティの活動や奮闘を弱めようとする機能をもたらした(Ono and Pham 2009)。モデルマイノリティ像は、アジア系アメリカ人の自助努力による成功を描くことで、アメリカ社会では人種に関係なく懸命に働けば、アメリカン・ドリームを手にすることができると主張し、政府からの援助を求めようとするマイノリティの動きを押さえたいという支配者層の意図が表れている。

参考文献

- アントニオ・グラムシ著、山崎功監修、代久二編集(1962)『グラムシ選集』第三巻、合同出版。
- 片桐薫編(2001)『グラムシ・セレクション』平凡社ライブラリー。
- 満谷マーガレット(1994)：「ムスメたちの系譜」川本皓嗣 編集『美女の画像学』思文閣出版。
- 藤田真文(2009)『ギフト、再配達—テレビ・テキスト分析入門』せりか書房。
- 藤田真文、岡井崇之編(2009)『プロセスが見えるメディア分析入門：コンテンツから日常を問直す』世界思想社。
- 古矢旬編(2006)『アメリカ的価値観の変容：1960年代—20世紀末』東京大学出版会。
- 坂本季詩雄(2006)「メディアの文化革命—ラジオ、テレビ、IT」亀井俊介編集『アメリカ文化史入門：植民地時代から現代まで』昭和堂。
- 増田幸子(2004)『アメリカ映画に現れた「日本人」イメージの変遷』大阪大学出版会

- 村上由美子 (1993) 『イエロー・フェイス ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』朝日新聞社。
- Bhabha, Homi K. (1994): *The Location of Culture*, Routledge (『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也, 正木恒夫, 外岡尚美, 阪本留美訳, 法政大学出版局, 2005.)
- Brooks, Tim, Marsh, Earle F. (2007): *The Complete Directory to Prime Time Network and Cable TV Shows, 1946-Present*, Ballantine Books.
- Feng, Peter X, ed. (2002): *Screening Asian Americans*, Rutgers University Press.
- Fiske, John, Hartley, John (1978): *Reading Television*, Methuen (『テレビをく読む』, 池村六郎訳, 未来社, 1991.)
- Fiske, John (1987): *Television Culture: Popular Pleasure and Politics*, Methuen (『テレビジョン・カルチャー ポピュラー文化の政治学』, 伊藤守訳, 粹出版社, 1996.)
- Hall, Stuart, ed. (1997): *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, SAGE: 259-261.
- Hamamoto, Darrell Y. (1994): *Monitored peril: Asian Americans and the Politics of TV Representation*, University of Minnesota Press.
- Kim, L. S. (2004): ““Serving” American Orientalism; Negotiation Identities in The Courtship of Eddie’s Father”, *Journal of Film and Video*; Winter 2004; 56,4; 21-33.
- Lippmann, Walter (1922): *Public Opinion*, Macmillan Company. (『世論 (上) (下)』, 掛川トミ子訳, 岩波文庫, 1987.)
- Marchetti, Gina (1993): *Romance and the “Yellow Peril”’: Race, Sex, and Discursive Strategies in Hollywood Fiction*, University of California Press.
- Ono, Kent A. and Pham, Vincent N. (2009): *Asian Americans and the Media*, Polity.
- Parish, James Eobert (2003): *The Encyclopedia of Ethnic Groups in Hollywood*, Facts on File.
- Park, Jane and Wilkins, Karin (2005): “Re-orienting the Orientalist Gaze,” *Global media Journal*, Vol.4, Issue 6.
- Praso, Sheridan (2006): *The Asian Mystique: Dragon Ladies, Geisha Girls, & Our Fantasies of the Exotic Orient*, Public Affairs.
- Said, Edward W. (1978): *Orientalism*, Vintage Books.
- Shimizu, Celine Parrenas (2007): *The Hypersexuality of Race: Performing Asian/American Women on Screen and Scene*, Duke University Press.
- Shohat, Ella, Stam, Robert (1994): *Unthinking Eurocentrism: Multiculturalism and the Media*, Routledge.
- Tajima, Renee, E. (1989): “Lotus Blossoms Don’t Bleed: Images of Asian Women,” Asian Women United of California, *Making Waves: An Anthology of Writings by and About Asian American Women*, Beacon Press.
- Wong, Eugene Franklin (1978): *On Visual Media Racism: Asians in the American Motion Pictures*, Arno Press.